

# 病虫害の発生概況

## 〔病害発生概況〕

### 1. 稲・麦

苗立枯病が早期水稲でやや多発生したほか熊本では山間高冷地の早植を中心にやや多発生した。そのほかでは並みから少発生にとどまった。葉いもちが全般的に発生し福岡、佐賀では多発生、長崎、熊本、宮崎、鹿児島ではやや多発生となった。7月上旬から中旬にかけて急進展し福岡、佐賀、長崎、熊本、鹿児島は注意報を発令し、防除の徹底を指導した。最近、作付増加の著しい品種黄金晴の多発例が多くみられ、各県とも局部的に本品種のいもち病によるズリコミ症状も散見されるほどであった。しかしその後好天に恵まれて、穂いもちの発生は長崎の東彼杵半島および各県の中山間地帯でやや発生が多かった程度で、そのほかは平年並みから少発生にとどまった。1983年九州全域にわたって大発生し問題となったもみ枯細菌病は本年も多発生となり発生面積98,726haに達し昨年に次ぐ史上2番目の面積を記録した。8月末まで高温が継続し、'83年と同様の多発生が懸念されたが9月上旬に低温が入り、病勢進展が停滞し、発生程度は全般的に軽度であった。しかし発生地域は昨年より一層拡大し、発生のみられない圃場がほとんど見当たらないほどとなっているので、今後の発生動向には十分留意する必要がある。紋枯病は生育中期の7月～8月が高温に経過し、佐賀、熊本は多発生、福岡、宮崎（早期水稲）はやや多発生したが、9月の低温などによって予想されたほど進展がみられず、最終的には全体的に並発生にとどまった。馬鹿苗病が全国的に発生増加の傾向がみられ、九州地域でも福岡、長崎、宮崎でやや多発生した。ベノミル剤耐性の懸念は現在までみられていないが、種子消毒の徹底、汚染種子の更新など防除対策の一層の励行が望まれる。白葉枯病は全般に少発生、発生面積約8,000haで前年よりさらに減少し現在ではほとんどマイナー病害となった。縞葉枯病が鹿児島の中央地区および熊本平野部の麦作跡で発生がやや多くなり、前年の約2倍、17,000haの発生がみられた。萎縮病は熊本でやや多発生したほかは少～並発生であった。黄萎病、内穎褐変病が南九州地域でやや多発生した。

麦類の病害は全般に発生が少なく、好天に恵まれたことと相俟って史上まれにみる大豊作年となった。特に例年被害の著しい赤かび病が前年に較べて発生面積で45%、発生程度も軽微で極く少発生にとどまったことが多収の一要因となった。多くの病害が少発生となった中でうどんこ病は各県ともやや多～多発生となった。また黄さび病が佐賀、熊本で多発生したが、ほかでは少～並発生となり、実被害は少なかったとみられた。縞萎縮病は大分で

やや多発生したもののほかは少発生であった。大麦斑葉病が大分の一部で多発生した以外は少発生となった。

### 2. 転作物

ダイズ紫斑病は宮崎で少発生、ほかはすべて並発生となったが、発生面積は前年の約半分にすぎなかった。さび病は大分で多発生したが、ほかは少発生となった。菌核病が佐賀の連作圃場で多発生し1,200haの発生となったが他は少発生であった。黒根腐病が佐賀でやや多発生した。葉焼病は熊本でやや多発生し、福岡のアキシロメにやや多発生したほかは少発生となった。べと病は大分の一部で多発生し、熊本でもやや多発生したほかは少～並発生となった。

ハトムギ葉枯病が大分県大野郡を中心に多発生し、9月下旬の発生圃場率が約94%の多発生となった。

### 3. 野菜・畑作物

1983年末から翌3月まで低温に経過したため病害の発生は全般に少なかった。この中で灰色かび病の発生が多く、薬剤耐性菌の出現も原因の一つとみられた。

キュウリ灰色かび病が冬春作で福岡、大分、宮崎で多～やや多発生し、宮崎は耐性菌に原因するとされた。べと病も冬春、夏秋作ともに大分、宮崎、鹿児島で多～やや多発生した。褐斑病は露地を主体に福岡、大分、鹿児島で多発生した。斑点細菌病、つる枯病、うどんこ病、菌核病が大分、宮崎、鹿児島で多発生し、緑斑モザイク病が長崎で局部的に多発生した。

ナスすすかび病が福岡、鹿児島で多発生し、大分ではうどんこ病が冬春、夏秋作ともに多発生した。鹿児島では灰色かび病、青枯病がやや多発生した。

トマト青枯、軟腐、かいよう、葉かび、輪紋の各病が大分の夏秋作で多発生し、冬春作ではTMV系モザイク病が多発生した。宮崎では疫病、灰色かび病、うどんこ病がやや多発生した。

イチゴ灰色かび病が大分、鹿児島で多～やや多発生し、炭そ病が福岡で、また疫病と炭そ病による苗立枯が佐賀で多発生した。長崎、大分では萎黄病が多発生した。

ピーマン白絹病が大分で、モザイク病が宮崎でやや多発生したほか、鹿児島では斑点病、TMV-P系によるモザイク病、軟腐病がやや多～多発生した。沖縄では冬春作で青枯病がやや多発生した。エンドウ灰色かび病、うどんこ病が鹿児島でやや多発生した。

カボチャ褐斑細菌病、べと病が宮崎の夏秋作でやや多発生し、鹿児島、沖縄ではうどんこ病がやや多～多発生した。沖縄ではまたWMVによるモザイク病がやや多発生した。

スイカつる枯病、炭そ病が宮崎でやや多発生し、沖縄では問題の灰白色斑紋病(TSWV)が依然として多発生した。またモザイク病(WMV)がやや多発生となった。

メロン斑点細菌病, うどんこ病が長崎の露地でやや多発し, つる枯病, ベと病が大分, 鹿児島で多～やや多発し, 疫病は大分でやや多発した。

葉菜類ではシュンギクベと病が福岡でやや多発し, キャベツ黒腐病は福岡, 大分で多発し, 宮崎, 鹿児島ではやや多発した。キャベツベと病, 根こぶ病, 菌核病が大分で多～やや多発し, レタス菌核病, ベと病が佐賀で多～やや多発した。ハクサイ軟腐病が熊本で夏作にやや多発し, モザイク病, 黒斑病, ベと病が大分で多発した。

根菜類ではダイコン軟腐病が大分で, 青枯病が宮崎でやや多発した。ニンジン黒葉枯病が大分で多発し, ゴボウ根腐病, うどんこ病も多発した。タマネギベと病が佐賀でやや多発し, 白色疫病が大分で多発した。サトイモ汚斑病が宮崎で, 斑点細菌病が鹿児島でやや多発した。

その他ネギ黒斑病が大分で秋冬作に多発し, ソラマメモザイク病が鹿児島でやや多発し, トウガンつる枯病が沖縄でやや多発した。

#### 4. 果樹

カンキツ黒点病が福岡, 熊本, 宮崎でやや多発し, 灰色かび病が宮崎, 鹿児島でやや多発, かいよう病が鹿児島で, 日やけ炭そ病と黄斑病が宮崎でそれぞれ多発した。鹿児島では赤衣病が大島, 熊本地区のポンカン, タンカンにやや多発し, 増加傾向がみられている。

ナシ黒斑病が福岡, 佐賀, 長崎, 熊本, 大分で45～50%の多発生となり, TPN剤の効力低下も原因とされた。

ブドウベと病が福岡, 佐賀, 熊本, 大分で多～やや多発した。つる割病が福岡で, 褐斑病が佐賀で, 晩腐病と灰色かび病が大分でそれぞれ多～やや多発した。生理病である縮果病が巨峰系を主体に熊本で多発した。

カキ落葉病が福岡, 熊本でやや多発し, またうどんこ病も福岡でやや多発した。

ビワがんしゅ病は長崎で春葉にやや多発し, ごま色斑点病も同様に春葉にやや多発したが, 夏葉, 秋葉には少～並み発生にとどまった。灰斑病が鹿児島でやや多発した。

モモ黒星病と縮葉病が大分でやや多発し, クリ実炭そ病が宮崎でやや多発した。その他カンキツ類のウイルス病では温州萎縮病が依然として発生しているほか, タターリーフが温州以外の種にも発生拡大している。

#### 5. 茶

全般に病害の発生は少なかった。炭そ病は鹿児島でやや多発したほかは並み～少発生となった。もち病, 網もち病も全県とも少発生となった。白星病が宮崎で並み発生, 輪斑病が鹿児島でやや多発した。白紋羽病が鹿児島で集団栽培5haのうち2haに発生し問題となった。

#### 6. 特用作物

サトウキビ黒穂病が鹿児島熊本地区で溜病株の抜取り不徹底のため, 6月ころからやや多発したが, その後は少発生にとどまった。沖縄では並み発生であった。葉焼病, 葉片赤斑病, 白星病, さび病ともに並み～少発生となった。鹿児島ではさび病の発生が品種Ni-1に多い傾向がみられた。

### 〔害虫発生概況〕

#### 1. 水稲・麦

長距離移動性害虫のセジロウンカ, トビロウンカ, コブノメイガの飛来が本年は少なかった。奄美および南部九州では5月にセジロウンカが2波飛来し, 7月5半旬までそれぞれ6波あった。一方西部および北部九州での主な飛来波は各地方ともほぼ同じで, セジロウンカは7月22～23日, トビロウンカは7月11～13日にあった。飛来量は両種とも前年に比べ著しく少なかったが, セジロウンカはほぼ平年並み, トビロウンカはきわめて少なかった。飛来後の密度は全般に低く経過し, 被害も少なかった。ただ鹿児島で8月下旬以降トビロウンカの生息密度が上昇し, 飛来量に比べ多目の発生となり, 9月14日に注意報が出された。また鹿児島市では, 梅雨明け後の7月23日にセジロウンカが1日82,245頭誘殺され, トビロウンカはわずかに9頭で注目された。

コブノメイガは7月12～14日が主な飛来日であるが, それ以前にも1～2波の小さい飛来があったものと思われる。飛来量は少なく, その後の増殖被害も全般に少なかった。また主飛来がおくれたため, 第3世代成虫の発生が出穂期以降となったので, 第4世代の発生はほとんどみられなかった。

沖縄地域の1期作ではトビロウンカが近年になく多発した。2期作のウンカ類の発生は少なかった。コブノメイガは1期が少, 2期は収穫に近づいてから多くなった。

本年イネミズゾウムシの発生が九州全県で確認され, 発生面積は合計1,732haに及んだ。なかでも宮崎県は, 1,491haと最も多かった。発生田はいずれも早期水稲で5月中～下旬に越冬成虫と幼虫による被害がみられた。新成虫は6月下旬からみられたがその被害は少なかった。発生した早期水稲に隣接する普通期水稲やタバコ跡作水田で8月上～中旬に, 次世代のものと思われる発生があり, 第2回成虫が9月3半旬から確認されたが, その密度や被害は少なかった。

イネゾウムシの発生面積が前年に比べ倍増し, 特に大分県では12,600haに及んでおり, 従来中山間部に多かったのが平坦部でもみられるようになった。大分県ではイネハモグリバエ, ドロオイムシ, イネツトムシの発生も多くなっている。その他ヒメトビウンカが福岡, 鹿児島でやや多, イネヒメハモグリバエが長崎, 宮崎でやや多,

1984年 水稻主要病害虫の発生状況（発生面積ha）

病害虫名	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎*	鹿児島*	沖縄*
(病害)								
葉いもち	36,450	15,481	7,600	25,010	30,250	24,605	26,135	100
穂枝梗いもち	34,793	8,959	3,000	16,750	30,230	21,098	22,153	33
紋枯病	35,644	27,637	12,500	36,000	32,960	27,460	28,147	155
白葉枯病	1,905	10	50	6,940	4,030	1,467	243	78
籾枯細菌病	19,062	24,005	6,000	18,500	13,300	6,633	17,409	—
縞葉枯病	3,992	1,401	1,500	120	2,740	0	6,173	—
萎縮病	9,038	1,324	8,000	7,500	10,440	10,731	12,138	—
黄萎病	0	0	150	—	0	3,481	4,874	3
ごま葉枯病	23,598	7,498	3,000	200	10,170	7,382	19,366	69
小粒菌核病	115	0	2,100	300	1,310	0	—	—
心枯線虫病	202	0	1,500	250	3,700	2,160	4,449	4
(虫害)								
ニカメイチュウ(第1世代)	200	0	50	—	600	0	—	—
(第2世代)	201	0	60	—	450	0	—	—
セジロウンカ	52,387	29,576	8,500	24,500	13,550	23,529	28,026	209
トビロウンカ	14,476	20,924	5,000	18,500	4,750	10,964	20,332	332
ヒメトビウンカ	44,061	9,593	6,000	9,500	6,510	27,082	17,985	—
ツマグロヨコバイ	59,232	52,248	18,000	31,000	14,700	29,295	33,591	271
イネツトムシ	1,915	540	900	4,500	14,200	1,230	1,630	5
コブノメイガ	21,880	21,212	7,000	17,500	25,800	14,093	22,672	92
フタオビコヤガ	47	0	60	300	2,500	396	204	—
アワヨトウ	280	307	500	900	25	1,763	157	1
イネゾウムシ	7,129	3,318	4,000	5,500	12,600	11,220	3,547	—
イネミズゾウムシ	12	21	143	7	6	1,491	52	—
カメムシ類	2,271	614	9,500	8,500	6,450	5,683	5,556	26

\*早期・普通期または1・2期の合計。

吸穂性カメムシが長崎でやや多と記録されている。

麦では佐賀県川副町の干拓地で大豆との輪作の大麦40haで本年もヤノハモグリバエが発生し、福岡でも8ha発生したが、いずれも程度は軽かった。小麦ではシロトビムシ類が佐賀、福岡で発生した。アブラムシの発生はほとんどなかった。

## 2. 転作物

大豆のハスモンヨトウが佐賀と大分で多く、福岡、長崎でやや多かった。しかし大発生した前年よりは少なかった。カメムシ類は長崎で多く、熊本でやや多かった。その他の子実害虫は全般に少なかった。

## 3. 野菜・畑作物

ミナミキイロアザミウマは露地越冬可能の沖縄を除き、九州では施設での防除対策によってかなり抑えられたが、多発事例もあり、特に露地野菜では、福岡のナス、熊本のカキウリ、長崎のメロン、宮崎のスイカなどで被害が目立っている。十字花科野菜のコナガはピレスロイド剤の使用もあって、よく防除されているが、一部の地域で本剤の抵抗性がみられ、今後警戒を要する。オンシツコナジラミが大分のトマト、ナス、キュウリで多い。

畑作物では、サツマイモでナカジロシタバ（大分・宮崎・鹿児島）、ハスモンヨトウとコガネムシ類（大分）が多目であった。ジャガイモではニジュウヤホシテントウ類が長崎でやや多かった。

南西諸島のサトウキビでは、カンシャコバネナガカメムシ第1世代の防除不徹底のところでは第2、3世代の発生が多かった（宮古・八重山）。またアオドウガネとセスジツチイナゴが一部で多かった（宮古）。

ウリミバエの根絶防除については奄美群島喜界島での不妊虫放飼によって、ゼロの状態が続いているが、根絶宣言には至っていない。沖縄県では不妊虫大量増殖施設が完成し、久米島への再侵入防止のための不妊虫放飼を続けるとともに、8月より宮古群島へ週300万頭の不妊虫放飼を開始した。

ジャンボタニシが九州各地と沖縄で養殖地より逃げ出しているが、沖縄ではイグサ苗の新芽、1期作水稲水苗代、ミズイモで被害を出し問題となった。鹿児島でもミズイモの一部に出ており、今後警戒を要する。

## 4. 果樹・茶樹

昨年多発した果樹のカメムシ類は、前半少なかったが、

後半増加し越冬量が多くなっている。カンキツではミカンハダニが北部九州で前半多く、南部九州では少なかったが、鹿児島では9月に増加が目立った。ナシではミカンハダニとワタアブラムシが多発し、ナシチビガが局地的に多かった。ブドウではワタアブラムシ、チャノキイロアザミウマ、ドウガネブイブイなどが一部の県で多発した。カキでは福岡でオオミノガが多発し、フジコナカイガラムシ、ハマキムシ類、ヒロヘリアオイラガもやや多発した。またカキクダアザミウマが九州ではじめて多

発をみた。佐賀ではカキミガがやや多かった。

沖縄県のミカンコミバエ根絶防除は順調にすすみ、11月に宮古群島で寄主植物の移動規制が解かれた。八重山群島でもゼロの状態が続いている。

茶樹では、チャノコカクモンハマキ、チャハマキ、チノホソガ、チャノミドリヒメヨコバイが一部の県で多かった。カンザワハダニが一番茶後～2番茶期にやや多かった。

(九州農業試験場環境第一部)